

社会医学と公衆衛生との出会い

大阪大学大学院医学系研究科（健康政策学） 高鳥毛 敏 雄

社会医学と公衆衛生との出会いを、もとにふり返って考えてみる。「社会医学」という言葉にはじめて出会ったのは、学生時代である。私が関係していた医療系サークルが実施していたフィールドワークに関西医大の社会医学研究会と称する学生メンバーが現れ、社会医学という言葉が流行しているのを知った。社会医学研究会（日本社会医学会）については、学生時代に公衆衛生学教室教授であった朝倉新太郎先生は、我々が属していたサークル顧問を努めて下さっていたため、教室に出入りしている中で社会医学研究会の存在を何となく知ることになった。社会医学研究会に参加したのは、大学卒業後に朝倉先生が会長となり研究会を主催することになり、1993年、兵庫県三田市にある関西地区大学セミナーハウスで開催された折に手伝いに行ったのが最初であったように思う。大学を卒業後は朝倉先生が、公衆衛生を勉強するには自治体に入らないと、との勧めで、大阪府衛生部の行政組織に入り、勉強する機会を得た。大阪府に入ると社会医学という言葉に触れることはなく、研究は「疫学」、保健所活動には専ら「公衆衛生」という言葉だけであった。いつの間にか、公衆衛生活動とは自治体が行うものであるように思うようになった。その後、大学に異動して、公衆衛生の「公」は、公共とか社会全体の意味であり、行政組織だけが担うものでないと最近は思っている。一方で、それでは社会医学とは何なのか時々考える。大学の講座では法医学、衛生学、公衆衛生学は社会医学系と括られている。「社会医学」には、ドイツ医学、衛生学、労働衛生の臭いがする。これに対し「公衆衛生」には、イギリス、公の制度、自治体の臭いがする。現在の日本社会医学会には保健所長、保健師の熱心な参加者もいるが、日本公衆衛生学会と比べて自治体の臭いが少ない。健康医療問題の背景には政治経済的な状況を含め、様々な社会的要因がある。労働環境、労働条件、環境問題、衛生問題、公害、薬害、貧困問題などの解決には、医学のみならず政治行政制度、経済体制、社会科学的研究が必要と思われる。2000年に大阪で開催された社会医学研究会で、結核、ホームレスの問題について報告させていただいてから再び社会医学会にできるだけ参加させていただいている。米国の公衆衛生学会に参加した折には貧困問題、HIV、ドラッグ、墮胎、虐待、銃事故、医療問題など、社会医学的課題の議論もなされていたことに驚かされた。そのことからすると、わが国でも取り組むべき健康問題が無尽蔵にあると思われ茫然とした思いになっている。